

# 「姦淫してはならない」の解釈

——志賀直哉「濁つた頭」・丹羽文雄「罪戾」——

佐藤 ゆかり

## はじめに

本論は、前号掲載の拙稿「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」の解釈（『国文白百合』第49号、二〇一八・三）に続く、聖書の語句が引用された小説を読み解くものである。今回は、旧約聖書出エジプト記20章14節の「姦淫してはならない。」<sup>半</sup>を引用している、志賀直哉「濁つた頭」（『白樺』、一九二一・四）と、丹羽文雄「罪戾」<sup>ざいれい</sup>（『世界』、一九五〇・八）を読んでみたい。

「濁つた頭」は発表当時、「性欲の俘となつた若い男の、当然滅びゆく経路を描写したもの」（月旦子執筆「四月の文藝」（『文芸』、「時事新報」一九二一・四・一七）、「性欲のはたらきもかなりに書き表はれてゐる様に思つた。」（島村冬三「四月の小説」、『新小説』一九二一・五）、「青年期に起る止めどなき性欲発動の心理と、恐ろしいその有様とが描いてある。」（生田蝶介「雑誌月評」、『文章世界』一九二一・五）、「性欲的衝動が如何に物狂ほしく青年の心を掻き乱したかと云ふプロセスは多少の不自然な点はあるが乍らも甚明瞭に表現されて居る。」（無署名

「四月の小説と脚本」、『三田文学』一九二一・五）などと評され、評価の中心は「性欲」の描写になっている。けれども、「性欲の抑へ難き力と基督教といふ問題も左まで深い印象を残さぬ。」（山帰来「四月の小説と脚本」、『国民新聞』一九二一・四・一五）という評は「性欲」に加え、キリスト教の要素が関わる点を指摘しており、看過できないと思われる。<sup>注</sup>

次に、「罪戾」は、発表当時、「作者はここでひとつの『良心の場合』を設定したのでしようが、それにしても主人公の心が少しも描けていず、また戦後の風俗画として見ても、とつてつけたようなカトリックの信心が不自然で、どつちつかずの気の抜けた作品になっています。」（中村光夫「文芸時評（下）」、『夕刊毎日新聞』一九五〇・八・九）、「カトリック信者の闇会社の社長が、若い頃の悪疾から妻を発狂させる、その後の社長の贖罪の話である。簡単にいえば、社長の精神生活と、それにも拘らず現実生活の罪業の反復との間にある矛盾を、十分に統一した人間像にまで昇華できていないし、社長の内心の追求が表面的で、わざとらしい。丹羽がこういう作品を手がける方向はよいのだが、作品の設定が主題を生かすきつていないのは惜

しい。」(瀬沼茂樹「創作月評」、日本読書新聞一九五〇・八・九)、或いはまた、「贖罪の記録ともいえようか、作品そのものは、必ずしも成功しているとはいいがたい」(高山毅「文藝時評(下)」、「中京新聞」一九五〇・八・二二)と、いずれも主人公の社長の「信心」の描写について指摘する。

しかし、注目したいのは、丹羽が「罪戾」を収める『好色の戒め』(一九五〇・一一、創元社)の「あとがき」で、「罪戾」について、次のように記していることである。

かういふカトリック信者を意外な社会的地位をもつ人に発見して、書いてみたくなつた。聖書の文句だけの信仰。肉体は絶えず誘惑に負ける。キリスト受難の極彩色の絵葉書のやうな苦しみ方しか出来ない人間である。本人にとつては精いつばいの懺悔である。どうして浅薄と言へよう。が作者としては、藝術家よりや医者をして、主人公の信仰を少しばかり批判させることにした。あんまり聖書の文字だけの苦しみ方なので、一言批評を下したかつたが、批評など下さない方がよかつた。信仰の深淺が問題でなく、かういふ苦しみ方をする人間を私は描いてみたかつたからである。

このように、丹羽自身も小説に難があることは認めているが、『丹羽文雄文藝事典』(二〇一三・三、和泉書院)で「罪戾」の項目を執筆した遠藤昭己が、丹羽のこの言葉を引用し、「カトリックの信者でありながら肉の欲望に打ち勝てない弱い人間の姿を、徹底的に抉り出している。(略)あくまで人間への興味にこだわっている。」とまとめ、「この小説は、愛欲と罪悪感の

葛藤を、救われ難い人間の切実な問題として正面から取り上げたもので、重厚な内容を持つ注目すべき作品」ととらえ直している点は首肯できる。

本稿では、それぞれの小説に描かれた、キリスト教信者の津田、成瀬が「姦淫してはならない。」という聖書の言葉を意識してから(今)に至るまでの経緯を読むところからはじめたい。

#### 一 「濁つた頭」における「姦淫してはならない」

「濁つた頭」の中心となる〈物語〉は、〈津田の語る物語〉である。しかし、この小説は、「自分」が、「津田君」という「二年間も癡狂院」について「未だ常人とは行か」ない人の話を聞いているという設定からはじまる。それに続けて、「私」と自称する「津田君」が語り始めるのだが、「津田君」は「或時代、私も小説家にならうと思つた事があつ」たと語る。「私も小説家に」という言葉から、聞く「自分」が小説家であるということ、さらに、「津田君」の語りの途中に、「(津田君の云ふ「貴方の此宿に來られた翌晩の事」と云ふのは最後に附記として簡単に書く。)」と挿入されていることから、「自分」は「津田君」の話を聞いて、リアルタイムではなく、それを後に(書いている)ということがわかる。そこで、まず「附記」を読むと、「自分」と「津田君」の関係が明らかにされていく。

偶然「隣り合せの部屋」の客人から、宿屋での女中を巻き込んだのトラブルを経て、「自分」は避けてきた、「津田君」の「恐ろしい夢」の話を聞くことになった。その結果、「津田君」の話を聞いて書く人と、「恐ろしい夢」の話をする人の関係に

なつた。つまり、(小湧谷の宿屋で出会つた小説家と小説家になりたかつた人の物語)が「濁つた頭」の大枠として設定されているのである。

この「自分」と「津田君」の關係を踏まえた上で、「津田君」は「親類や友達や、殊に自家の者等の見てゐる私で終つて了」いたくなかつたため、「自分」に「ジャステイファイ」することを試みる。「津田君」の「ジャステイファイ」の目的は、なぜこのようになってしまつたのか、或いは、こうならざるを得なかつたのかを、「自分」に伝えることにある。それは「自分の事も小説のやうに書いて見たいとは思ふんです、然し駄目です。拙もそんな根気はありません。貴方のやうな方に聴いて戴けるといふのが今は望み得る最上」ということからもうかがえる。なぜなら、もう「津田君」は小説家になれないからである。このような状況設定があつて、「津田君」の(今)がある。

では、中心にある「津田君」の話とは何か。

津田清松は「自家の書生の一人が大拳伝道といふ運動のあつた時に洗禮を受けた」ことをきっかけに、「十七歳の時から丁度七年間温順な基督信徒だつた」という。「基督教に接する迄は私は精神的にも肉体的にも延びくとした子供」だつたが、接してからは「日常生活」が變つた。しかも、「いつもく私の暢気な心」を苦しめたのが、「姦淫する勿れ」だつた。

盗む勿れ、殺す勿れ、いつはりのあかしをたつる勿れ。かう云ふ種々の禁制がありますが、平和な家庭に育つた私の身には、かういふ掟の大概のものは殆ど何の矛盾も起しませんでした。然し只一つ姦淫する勿れ、この掟だけにはい

つもく私の暢気な心も苦しめられました。

「只々教会で教へられる事を其儘に信じて、何でも彼でも自分自身を、それへ嵌込んで行かうと努力した」にも関わらず、「性欲の事はかりはどうにも自由に」ならなかつたという。つまり、「掟」を知つてしまつたばかりに、「性欲の事」がどうにもならなくなつたというのが、津田に突きつけられた問題だつた。

そこで、津田は、この問題について、自分なりの解釈をする。或日、牧師さんが、姦淫の罪悪だと云ふ事を本統に強く云ひ出したのは基督教だけだと云つて、姦淫罪は殺人罪と同程度に重いものだとして切りに説いた事がありました。(略)全体姦淫とは何だ? 性欲を満足させる同じやうな行で、姦淫になる場合と、ならぬ場合と其処にはどれ程の界があるのだ? 詮ずれば結婚といふ形式以外、何にもありはしないではないか。こんな事を思つて二三日して私は此問題を「関子と真造」といふ小説に作り直しました。これらは當時、教に対する出来得るかぎりの反抗だつたのです。

津田が語る「関子と真造」のあらすじは、関子の父は「軍人」で、「都合三度妻を持つた」人物で「道徳家」といわれている。しかし、「従姉弟同士」の関子と真造は、「心から相愛するやうになつた若い二人」だが、「恋が未だ關係すらない内に既に猥らな事として」、父から「迫害」され、遂に「皆の疑つてゐたやうな關係に事実なつて行く」というものである。この内容は、

夫婦間の關係は如何いふ場合も罪悪にはならず、結婚の式

を取つてゐない若い男女のそれはどれ程互に愛情を持つてゐても、罪悪——殺人罪に等しい罪悪になるといふのは何故だらう

という津田の心情を表し、津田自身が「気味の悪い謀反」と自覚するものだった。

さらに、津田は「牧師さんの私宅に集る会」の「三分以内の感話」の材料に、「ほこりの中にあるなら、知らずに平気でゐる人の方が、幾ら幸福か知れないと思」つたことを用いる。津田の感話の焦点は、「知らずに平気」でいることが「幸福」だということにある。逆に言えば、知ってしまったがために「平気」でなくなり、「幸福」でなくなった、つまり、「姦淫罪」が「殺人罪と同程度に重い」と知ってしまったがために「平気」でなくなったことを意味する。ここに、津田の〈今〉に関わる根源がある。

後に、津田は「姦淫罪」を犯すが、

どうしても前夜の事は矢張り罪だと云ふ気がしてなりませぬ。何故なら私は前夜も今朝も、いつも必ずする祈りを仕ませんでした。それが口では何と理窟をつけようとも、自らその罪だつた事を認めてゐる証拠ではあるまいか。と思ひ、「姦淫罪」の「掟」が歯止めにならなかつたことに気づく。「矢張り其夜私は接吻を許したのです。翌晩も同じ事です。其又翌晩も。」と続き、とうとう「唯一の逃げ場は絶望的になる事より他」なく、そこには「宗教もない、道徳もない、社会もない、家庭もない。」という状況に陥る。

津田とお夏は逃避行の末、ある温泉宿にたどり着く。津田は

そこで「昼間畳屋が使つてた其錐がある。鋭い長いのが光つて落ちてます。もう何の考もなく、それを取るとぶつりとやつて了つたのです。」と、お夏殺害を語る。その後、津田は一人で逃げるが、

不図上を見ると、其処に洋服を着た大きな人が立つて居ます。色々な意味で久しい間、御世話になつた土村先生です。(略)あの真夜中、あの山中に土村先生が立つてゐられる、そんな事はあり得ないと思つたのです。今まで自分の繰り返して来た記憶は何なのだ。何しろ、それは現実につつた事の記憶ではないと思はれて来ました。

と語り、結局、「気がついた時には私はいつか東京の癡狂院に入れられてゐました。」と話を締めくくる。つまり、津田はキリスト教に会わなければ、「癡狂院」に入れられることはなかつたということになる。

ところで、「濁つた頭」は明治末期の富裕階層の青年に起こりえた逸脱を克明に描き出した作品である、とひとまず要約できよう。西洋文化を最先端で享受した人間の、いわば栄光と悲劇とが、そこには展開されている」という山口直孝の指摘があるが、津田はキリスト教を知つたことだけが理由で、「未だ常人とは行か」ない状態になつたわけではない。

一つは、津田は教会で「文科大学の学生」から「外国の新しい文学の話を書いて新しい小説を読むのを覚えた」とき、

随分肉感的な事を書いた本も読みましたが、それが私の宗教と大した矛盾も起さなかつたと云ふのは、其人からさういふ作家の伝記とか批評とかを聞かされて、一途に尊敬を

払つてゐたからで、どんな事が書いてあつても、私はそれに立派な意味をつけて読んで居ました。

と、津田はキリスト教と「矛盾」がないよう、小説に「意味をつけて」読んでいた。しかし、「姦淫する勿れ」という聖書の言葉については、キリスト教信者として、キリスト教における「意味」を追求することも、反対に、キリスト教とは全く離れて、自分にとつて都合のいい「意味」を見つけることもできなかったことがあげられる。

もう一つは、津田は、「自分」に対し、まず「私も弱い人間です」という言葉から始めて、

私のやうな自己のない、弱い、思ひ切つて信ずる事も、思ひ切つて反抗する事も、さうかといつて、ほんやりと平気である事も出来ない人間には、唯一の逃げ場は絶望的になる事より他はありません。

と語っていることから、キリスト教に対して反抗するか、キリスト教を無視して平気であるか、そのいずれもできなかったということである。

このように読み解くと、「濁つた頭」は、キリスト教信者の青年津田が、「姦淫する勿れ」という聖書の言葉の突きつけられたが、その（意味）を理解することなく、また、否定できなかったために、（今）も自分の（弱さ）と向き合っていることを描いている、といえるのではないかと思われる。

## 二 「罪戻」における「姦淫する勿れ」

では次に、「罪戻」を読んでいく。

成瀬玄馬の妻の利恵は「十年年目の初産」「毎夜の空襲」「胎児の死」という、「烈しい衝動」によつて「バラリーゼ」を発症する。「脳病院」の院長の説明によると、「バラリーゼ」とは「十五年二十年」の「潜伏」期間があり、「何かの誘因」で「急激に現れる」「梅毒」だという。それを聞いた成瀬は「膝まずき、十字を切り、神に懺悔」する。

私の罪でございます。若い時代の私は、放蕩無頼、あらゆる悪いことを犯してきました。妻のためには、どのような苦しみにも耐えねばなりません。神に誓います。神の救いを祈ります。まったく妻だけは、少くとも罪のない者でした。神もそれはご存知の筈です（略）私も妻も、カトリックの信者でございます。（略）私と妻は手をとりあつて、神に祈りをささげましたが、敵は外にあるのではなく、二十年も妻のからだの中にかくれていたのです。知らぬこととは言いながら、不浄なからだで、私共は神に祈りをささげていました。その刑罰です、神のいかりです。

病院長の前で祈りの言葉を口にする成瀬は、「自分だけに責任のある罪の苦しみを、自分だけが担うのは正しいことだと思つめる」。しかし、築地の料亭で芸者のたよりと出会い、「再び罪を犯す、という声を彼は内部で聞いた。かえつてそれが、勇気をあたえた。」と、たよりと関係を持つてしまう。ところが、ある日、成瀬の妻が、突然たよりの家に現れる。数日後、成瀬はたよりに、「私は妻のもとに帰つていくよ。私のいくところは、気の狂つた妻のところ以外にはないのだ」と、「多額の金を書きこまれた」小切手を渡して別れる。



その後、成瀬の会社の会計担当者である京紺織江に、不正疑惑がもたれ、成瀬は直接織江から話を聞く。すると、織江の夫は病死、身よりもなく、子どもを一人抱えて暮らしていることを知り、成瀬はお金を置いて帰る。それからたびたび織江を訪ね、とうとう関係を持つ。ところが、再び妻が織江の家付近に現れ、成瀬は「妻が二度までもかくし女のありかを嗅ぎつけた不思議」を思い、織江とは距離を置くことにした。しかし、織江から、子どもを身ごもったことを手紙で知らされ、一方の妻は「夜は、いっそう鬼気が迫る」様子となる。結局、成瀬は、「私はこれから、姦淫にいく。」と、織江の家に向かう。

とここで、「罪戾」に裸り返し見られる言葉に「神のいかり」がある。以下はその例である。

・ 不浄なからだで、私共は神に祈りをささげていました。その刑罰です、神のいかりです。

・ 神のいかりがいかに烈しくて、深いか

・ 神のいかりには、謙虚でなければならぬのだ

・ 神の怒りが、妻のからだを借りている。

・ 神のいかり、その罰、そのゆるし……私は、当然うけなければならぬのだ。神の刑罰を。

・ 涯知れない神のいかりの前に、彼はおののきふるえている。祈りの文句すら、彼の口には上らなくなっていた。恩寵のあることすら思い出さなかった。

これらの例から、成瀬は、「私の罪」の結果、「神のいかり」があり、それゆえ妻が発症したと、〈因果応報〉として受けとめていることがうかがえる。

〈因果応報〉は、小説中に引用されている、「己が肉の為に種々者<sup>ま</sup>は肉より敗壞を獲りとり」(二三三頁)、「己が肉のために種々者<sup>ま</sup>は肉より敗壞を獲りとり」(三三五頁)という、ガラテヤの信徒への手紙6章8節の引用からもわかる。新共同訳聖書では、次のようにある。

自分の肉に詩く者は、肉から滅びを刈り取り、霊に詩く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。

聖書では「肉」と「霊」が対句になっていて、注解によれば、それぞれ「自分の肉をよりどころにして生きる者」、「霊をよりどころにして生きる者」のことであり、(略)自己中心主義の「古い人」に生きる者と神中心主義の「新しい人」に生きる者<sup>ま</sup>といわれる。しかし、成瀬は「肉」だけを取り上げ、しかも「肉」を〈肉体〉の意味に、「敗壞」を妻の発症という現実の生活の意味にとらえ、この聖書の言葉を〈因果応報〉ととらえている。

また、成瀬がたよりに、「私は妻のもとに帰っていくよ。」「これ以上の罪を重ねることは出来ない。」と言って、「坐り直した」ときにつぶやいた言葉の中で、次の聖書の言葉を引用している。

彼はあなどられて人に棄てられ、かなしみの人にして、なやみを知れり。まことに彼は我等のなやみを負い、我等のかなしみをになえり。然るに我等思えらく、彼は責められ神に打たれ苦しめらるるなりと、彼は我等のとがのために傷つけられたり、我等の不義のために砕かれたり。みずからこらしめを受けて我等にやすきを賜う。その打たれし痕<sup>きず</sup>

によりて、我等は癒されたり。我等はみな羊のごとく迷いで、各々自己の途に向えり。然るにエホバは、我等凡てのものに不義を彼の上に置きたまえり。…彼は我民のとのために打たれしなり

これは、イザヤ書53章3節前半、4節から6節、8節後半である。新共同訳聖書では、次のようにある。

彼は軽蔑され、人々に見捨てられ多くの痛みを負い、病を知っている。(略) 彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに、わたしたちは思っていた、神の手にかかり、打たれたから彼は苦しんでいるのだ、と。彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり、彼が打ち碎かれたのは、わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。わたしたちは羊の群れ、道を誤り、それぞれの方角に向かつて行つた。そのわたしたちの罪をすべて主は彼に負わせられた。(略) わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり命ある者の地から断たれたことを。

このイザヤ書53章は「苦難の僕の歌」と言われる。はじめは〈因果応報〉として、「その人の罪に対する神の罰」だと思つていたが、「それは全くの誤り」で、

《彼が担ったのはわたしたちの病、彼が負ったのはわたしたちの痛み》であった。このことに気がつくことよって大きな転換がなされている。(略) すなわち、因果応報ではなく、他者の苦しみと《背き》《咎》を代わりに負う代

理が、この僕においてなされているのである。(略) ころにおいて苦難の意味が全く新しく捉えなおされている。

といわれている。しかし、成瀬は、イザヤ書53章の引用の後に、主イエスの死は、人に悔い改めを促すためだけではなかったのだよ。罪と罪人とに対する神の態度をかえるために必要だったのだ。それが、十字架の意義だ。その中に一切がふくまれているのだ。神の害、神のいかり、その罰、そのゆるし…私は、当然うけなければならぬのだ。

と語り、あくまでも妻の発症と、〈今〉の状況を、過去の出来事に端を発する〈因果応報〉として受容している。

先に、成瀬は、ガラテヤの信徒への手紙6章8節の「肉」の部分だけを語っていると指摘したが、成瀬は過去の過ちと妻の病状を、自らの「肉」の結果によって降りかかった「悲劇」と受け止め、苦しんでいる。しかし、一方で、「妻の悲惨に向うと、その度に彼は改宗するような衝動をうけた」が、「ふと気がつく」と、(略) たよりの肉体を描いていた。京紺織江の(略) あくことを知らない強烈な欲望を思いかえして、胸に波をかきたてている」とあつて、成瀬の現実の〈行い〉が、反省とは全く逆方向になっている。しかも、たよりのところにも、織江のところにも、妻が現れ、それをきっかけに別れるが、結局は元に戻る。

このような成瀬の〈今〉に至る経緯をまとめると、「姦淫する勿れ」の命令の前にもうたえるキリスト教信者が、命令を受容しようとするものの、結局は受容できなかつたため、命令そのものを無視する生き方を選択しているということを語ってい

るのではないか。「罪戾」は、聖書の言葉を唱えるものの、妻の病氣の原因についても、〈今〉も妻の看護生活を続けている現実も、「姦淫する勿れ」を破つたからと、〈因果応報〉ととらえる。けれども、それでもなお、〈今〉も妻以外の女性との関係を持ち続けているという、矛盾したキリスト教徒成瀬の生き方を描いているといえるだろう。

### 三 「姦淫してはならない」のキリスト教的解釈

さて、「濁つた頭」と「罪戾」における「姦淫してはならない」の受容について見てきた。共通するのは、主人公の〈今〉に至る経緯のはじまりが、「姦淫する勿れ」を厳しい倫理規定ととらえているということである。具体的には、「濁つた頭」では、

一つの大きい不思議は私の基督教的の考えといふものです。姦淫罪といふ掟は何年といふ長い間、私を苦しめぬいたものでした。一度の恥かしい行すらが、(略)私を煩悶させたものでしたが、現在愛情もなしに続けてゐる姦淫に、殆ど何の宗教的煩悶も感じない。(略)あれ程長くつきまつてゐた教へと云ふものが、余りにたわいなかつたのは今から思つても不思議に堪へません。然し尚不思議な事は、それ程宗教とは離れて仕舞ひながら、しかも益々私が絶望的になつて行く事です。

とあり、「罪戾」では、

妻の悲惨な姿を眺めることは、もはやあきらめであり、どうにもならないことであり、辛抱の意味になつてゐる。猥

に似た喚び声が、大して苦にならなくなった。彼は消沈状態に陥ちているようだった。と言つて、己の罪を忘却したというのではない。絶望に慣れたのである。

とある。つまり、二つの小説に共通するのは、キリスト教徒として「掟」に苦しめられたが、その苦しみは「現在」もなお続いている、しかし、「何の宗教的煩悶」を感じることなく、「絶望」に至るといふことである。

さらに、共通点は、「姦淫してはならない」という十戒のことばだけでなく、マタイによる福音書のイエスの言葉が関わっているといふことである。

先に引用した、「濁つた頭」の次の箇所である。

或日、牧師さんが、姦淫の罪悪だと云ふ事を本統に強く云ひ出したのは基督教だけだと云つて、姦淫罪は殺人罪と同程度に重いものだと切りに説いた事がありました。

「罪戾」では、成瀬が、「ひっそりした邸の中から、朗々たる声」が聞こえたとして、次のように述べられている。

色情を起すものは心中すでに姦淫したる也。ゆえに若し汝の右の眼汝を此罪に陥さば抉出してこれを棄てよ。それは五体の一を失うは全身を地獄に投入れるるよりも勝ればなり。また若し汝の右の手汝を此罪に陥さばこれを断りて棄てよ。それは五体の一を失うは全身を地獄に投げ入らるるよりも勝ればなり

また、次のようにも述べられている。

若い時のあやまちは、妻を発狂させ、たよりをすて、いままた織江の腹に子供をこしらえた。イエスほど姦淫を嫌つ



た人はいないのだ。姦淫の罪に対する彼の詰責は、峻厳をきわめている。成瀬玄馬ははじめて福音書をよんだとき、姦淫罪に対するイエスのあまりに激越な態度に奇異な感じを抱いたほどだ。

汝姦淫する勿れ。

シナイ山の嶺から、火と煙と大なる声と共にモーセに降ったという神のいましめは、ひと度犯してみれば、次々と犠牲がふえることで、彼は思い知らされている。

共通する、マタイによる福音書5章27節から30節までの言葉は、新共同訳聖書では次のようにある。

あなたがたも聞いているとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである。もし、右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまずかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。

この聖書の箇所について、注解では、

イエスは《姦淫》を、行為の次元から女性を見る男性の眼差しの奥に秘められた心の次元にまで立ち入って問い直し、律法の限界を超える。《姦淫》はイエスによればまず心の中で起こるのであり、その有無は他者が外から判断できることではない。(略) イエスの言葉に従って律法の根本に

立ち戻ってみるとき、「姦淫」をしていないという自分の正しさの証明が大切なのではなく、他者の人間関係(結婚)を尊重することが重要であることが浮かび上がる。<sup>注8)</sup>といわれている。

出エジプト記にある「十戒」における「姦淫してはならない」は、一説には、「旧約聖書の戒律とそのユダヤ教における適用は、きわめて男性中心的で(略)相手の女性が人妻(ないし婚約中の女性)の場合に限られる。人妻はその夫のものであるからである。(略)また「姦淫」は相手の夫に対する罪であって、自分の妻への不貞として罰せられるものではなかった」という。しかし、「他者との共生において最も重要な禁令<sup>注10)</sup>」であることは確かである。個人の問題でありつつ、「婚姻関係の尊厳<sup>注11)</sup>」、言い換えるなら、他者との関係、個人が生きる社会との関係における禁令なのである。その意味を、キリスト教は、「律法の根本に立ち戻」って解釈するのである。

とすると、「濁つた頭」の津田の場合には、お夏は未亡人、「罪戾」の成瀬の場合は、たよりは独身、織江も未亡人で、(婚姻関係)の観点でキリスト教的解釈をするならば、津田も成瀬も「姦淫」にはならない。にも関わらず、二人とも、「姦淫する勿れ」を厳しい倫理規定と受容し、さらに、イエスの言葉を加えて、一層厳格な倫理規定と受容したことになる。その結果、津田は、告白後も「それからもうなされ」ていて、「ジャスティファイ」は失敗する。成瀬は「次々と犠牲がふえる」と思いながらも妻以外の女性と関係を持ち続け、その結果として、

どのようなことが起こっても、「カトリック信者」だから「神のいかり」を引き受けるという、「矛盾」を抱きつつ、「私はこれから、姦淫に行く。」と、再び織江のところに向かう。いずれにしても、津田も成瀬も、キリスト教信仰を棄ててはいないが、キリスト教による〈救い〉も求めていない。

二つの小説は、「姦淫してはならない」という聖書の言葉が、如何にキリスト教信仰を揺るがせ、受容し難いものであるか、「罪戻」の言葉でいえば、如何に人間が「矛盾のかたまり」で、〈弱い〉存在か、あらためて考えさせる。しかし、それだけでなく、キリスト教信者であっても、信仰の有無とは無関係に、弱さを抱えたまま生きていくのが人間である、とも読みとれると思う。

「濁つた頭」の引用は『志賀直哉全集』第一巻（一九九八・一二、岩波書店）、「罪戻」の引用は『丹羽文雄全集』第24巻（一九七五・六、講談社）に拠る。なお、旧漢字は新字体に改め、ルビは必要と思われるものにとどめた。

注1 『新共同訳旧約聖書略解』（二〇〇一・三、日本基督教団出版局）によれば、申命記5章18節にも同じ言葉があるが、これは出エジプト記の「再録」といわれている。

2 荒井均『濁つた頭』論（『文藝と批評』七七号、一九九八・五）は、「この作品のテーマは、「キリスト教」と

「性欲」であるとすることができよう。キリスト教に入信した青年が、いかにその、姦淫罪の戒律に苦しみ、それを破つたあと、いかに墮落するか——いわば、キリスト教という「観念」と、「性欲」という「肉体」との戦いにおいて、肉体が打ち勝つた話である。（略）キリスト教という「観念」には打ち勝つたが、社会性という現実に負けたのである。」津田君の逸脱したのは、キリスト教の戒律からのみでなく、社会全体からであったという事実、——これが津田君を敗者にした。「志賀直哉がこの作品で確認しようとしたのは、キリスト教と性欲の葛藤によつて生じる、社会性の逸脱の問題である。」と指摘する。

3 山口直孝は「志賀直哉『濁つた頭』の輪郭」（『日本文藝研究』、一九九〇・七）で、「津田」は語りの現在において、なお完全な精神状態に復しているとは言いがたい（津田君のうなされる事はそれからも毎晩であった。『付記』。）と指摘する。

4 『新共同訳新約聖書注解Ⅰ』（一九九一・七、日本基督教団出版局）。

5 注1によれば、「初代教会はこの「苦難の僕の詩」に決定的な影響を受け、イエスの十字架に至る苦難と死の意味をこの箇所から理解したと言つても過言ではない。」という。なお、このイザヤ書53章は遠藤周作『深い河』（一九九三・六、講談社）にも引用されている。

6 「罪戻」の成瀬の場合、「若い時代（略）放蕩無頼、あら

ゆる悪いことを犯して」きたために、妻を「発狂させ」たという設定である。過去の出来事が聖書でいうところの「姦淫罪」に当たるかどうかはわからない。なお、病院長から妻の病氣の原因が「十五年二十年昔の梅毒」と聞かされた時、成瀬は聖書の言葉を語るが、病院長はそれが「お経読み、抑揚がなくて、棒読み」で、「妻をパラリーゼで発狂させた良人の苦悩、懺悔、悔恨の表現が、それ自らの表現を見出してるほどに強烈なものでなかった」、また、芸者たよりは、成瀬に対し、「型にはまった方法で、自分を苦しめている」と、第三者の視点で語られている箇所がある。これらの描写は、成瀬を客観的に見て、彼が〈行い〉だけの人物ということを表現していると思われる。

柄谷行人が『日本近代文学の起源』（一九八〇・八、講談社）で、「姦淫してはならない」について、「姦淫するな」というのはユダヤ教ばかりでなくどんな宗教にもある戒律であろうが、姦淫という「事」ではなく、「心」の問題にしたところに、キリスト教の比類のない倒錯性がある。（略）彼らはいつも「内面」を注視しなければならぬ。」（引用は『定本柄谷行人集』第一巻所収（二〇〇四・九、岩波書店）増補改訂版）と述べていることを引用し、神代知子は「志賀直哉『濁つた頭』論（『文芸研究論集』25号、二〇〇六・九）で、「姦淫するなかれ」という掟が果たした最も重要な機能」として、「基督教」が「私」に残したもっとも重要なことは、信仰心で

はなく、「内面」とそれに伴う告白すべき罪であるということ」と結論付け、津田が「私」に「告白」するといふ、「濁つた頭」の枠組みにもキリスト教の影響があることを指摘する。

8 注4に同じ。

9 注4に同じ。

10 注1に同じ。

11 注1に同じ。

（本学大学院修士課程第二回修了生、  
本学非常勤講師）